

# 卒業記念講演会 報告記

平成28年 1月20日（水）

今年度の卒業学年は、卒業記念品として、形のあるものでなく「心に残るもの」、ということで在校生のために講演会を開催しました。講演者は、全国各地から講演依頼が殺到している中村文昭先生なかむらふみあき（クロフネカンパニー（飲食店）経営者、三重県出身、昭和44年生）です。中村先生がおっしゃるには、決して真面目な高校生でなかったが何とか卒業し、家出同然で上京し、力仕事のバイトをしながら無為な生活をしていました。ところがある日、良く通っていた焼き鳥屋で、その後の人生の師となる人に出会い、生活が一変したそうです。



中村先生はステージ真ん中でどっしり腰掛け話しました。

以下にそのお話を紹介しましょう。

## 1 出会い

・ 焼き鳥屋で出会った男性は、ある夢をもち、野菜の行商をしながら資金を貯めているという。18才の私は、その話を聞いてスイッチが入った。その場で弟子入りし、行商の手伝いを始めた。その夢とは、仲間と共に東京の六本木で、小さくても飲食店を出すというものだった。行商の仲間は6人おり、2人1組の軽トラで野菜を販売して歩いた。

## 2 師の教え

・ 何か頼まれたら、「返事は、0, 2秒でいえ。」「お前、俺と話してると返事が遅いなあ。返事の遅いやつは、頭の中で損得を考えているんだ。そして、断ったりする。これじゃだめだ。0, 2秒で『はい』だ。」

・ 一番大切な教えは、「頼まれごとは、試されごと」である。師匠から非常に叱られたことがあった。小銭を渡され「自販機からジュース2本、買ってきてくれ」といわれた時だ。暑い日だったので、木陰を選びながらチンタラ歩いて、くわえタバコで、買って来た。すると、道路の真ん中に師匠が腕組みして待ってる。私が近づくと、左頬を殴られた。「お前を2階から見ていた。ブツブツいって歩いていたら。雑用の意味がまだ分からないのか。もしお前が汗だくになり、短時間でジュースを買って来たら、相手はびっくりする。100円のジュースでも、お前次第で1000円の値打ちに出来る。」

そしてこういった。「頼まれごとは、試されごとなんだ。」





・ 就職した直後、新人は誰でも出来るような雑用を、必ず言い付けられる。それを上司は陰で見ている。そこで判断されるんだ。もし、全力でやるなら、どんな仕事も全力でしてくれるだろう、と上司は思う。可愛がられる。上に引き上げられる。若い頃は回りから可愛がられることなんだ。返事が0, 2秒だと相手はこういうかもしれない。「ハイハイといってるが、何を頼まれるかわかってるんか」 そしたらこう言え。「中身は分かりませんが、何でもやります。」

### 3 修行の開始

・ とうとう六本木で7坪の飲食店を出すことになった。そのとき師匠は19才の私にこういった。「都内のホテルで4ヶ月半、カウンターでの酒作りの勉強をしてこい」 どういうツテか、ある有名ホテルの調理場に行かされた。調理場といっても、私の仕事は洗い場だった。かつこいいバーテンダー姿を想像していたが、私は長靴、ゴムの前掛け姿で、相棒はやる気のない先輩。先輩はぶつぶつ文句だらけ。連日の洗い物。先輩には誰も話しかけない。これを8ヶ月やっているという。私はやりきれなくなり、夜逃げした。

・ 師匠の所に戻った時、今までの500倍叱られた。「お前、自分のイメージと違っていたんだろう。この仕事は俺には合わないといいながら、場所を変え続ける者がゴマンといる。ホテルの仕事は雑用からだろう。19才のお前に、洗い物が与えられたんだから、人と違うようにやれ。文句をいわず稲妻のようにやれ。場所を変えないで、自分を変えろ。」

・ 恥を忍んで洗い場に戻った自分は、時計の針を見ながら、洗い始めた。日本一の洗い物師になる気持ちで。まず、先輩が驚く。そして、1週間誰も話しかけなかったのに、一人の料理人が話しかけてきた。「そんなに頑張っても、給料上がらんぞ。」 私はそのまま、煙が出るほど速く洗い続けた。その内、珍しいものを見るように、一人また一人とホテル中の人が見に来た。頭の中はただ一つ、「洗い物日本一」だ。ある日調理場の中で、料理長が部下にいうのが聞こえた。「お前達中村を見習え。嫌な仕事なのに上機嫌でしているじゃないか。」



・ ある多忙な日、料理長が突然叫んだ。「野菜が足りない。誰かスーパーに走れ。」 15人の料理人は誰も動けない。持ち場があつて手を放せない。料理長はイライラする。自分が手を上げたかったが、料理長が怖くてだめだった。というのは、一流は皆同じだと思うが、めちゃくちゃ怖い人だった。ある時料理人が失敗すると、料理長は鳥のもも肉で、料理人の顔を何度も殴った。また、包丁の刃の反対側で料理人を叩き、料理人は頭からポタポタ血を

流しながら叱られていた。その時、千円札が丸めて投げられた。自分に向けて。私はキャッチして叫んだ。「買えるだけですな。」そして思った。「料理人達よ、よく見ておけよ。」

・ 私は全力でスーパーに走った。もっと速く走れないかと思いながら、なぜか笑えてきた。スーパーのレジの行列の一番前に、わけを話して入れてもらい、全力で戻った。料理長がいった。「お前、そんなに早く行ってきたのか。」私はハアハア言って返事が出来なかった。そして、洗い場に戻った。その後、料理長が話しかけてきた。「おいバイト。名前なんてんだ。どこ出身だ。」「中村です。三重県です。」「お前、田舎もんだろう。猿と遊んでたから、早いんだな。」

・ その後、料理長は私にしてくれた。「お前、また買って来いや。」「早いね、馬鹿じゃないの。」「今晚メシに行くぞ。」と誘ってくれ、食べながら料理長はこういった。「俺は何年もやってるが、お前のように全力でやる者を見たことがない。

なぜ頑張るんだ。」「自分は小さい飲食店の、カウンターの酒作りを任されました。その準備でこのホテルに来てます。」という、料理長は、「お前は俺の若い時そっくりだ。」

その翌日の全体朝会で、料理長がこういった。「みんな、洗い場の中村を男にしてやりたい。カウンターの中に入れてやってくれないか。」



3年生から感謝の花束贈呈です。

(こんな話が続き、この後は、中村先生がご自分の店を持つことになり、また面白い逸話が続きました。)



自分は花束を持って次の講演会場に行けませんから、どうか学校で飾ってください、とのことでした。また、中村先生から豊高へ色紙をいただきました。「頼まれごとば、試されたい」



拍手に送られ体育館を後にしました。